

# 笛吹市探訪

シリーズ 第23回

## 武田氏と笛吹市 ①



武田氏十一代、信成館跡(八代町北、清道院)



武田氏十四代、信重の墓(石和町小石和、成就院)

信玄を引き合いに出すまでもなく武田氏は日本史において非常に大きな役割を演じた武家である。笛吹市は武田氏活躍の主要な舞台であったが、彼らの残した痕跡は意外に少なく、具体的な史跡は断片的である。また歴代武田氏の歴史は乱世を反映して非常に込み入っており、把握するのが難しい。

このページではこの先数回に渡って市内に残された武田氏由来の「証拠」を紹介していくことにするが、今回は歴史的出来事を見ていこう。

武田氏は平安後期から続く武家で、始祖は源義光とされる。義光は河内(大阪府)の源氏一門出身で、奥州転戦後、常陸国(茨城県)平氏から妻を得た。その子義清は常陸国武田郷に居を構えたが、甲斐国に流刑され、武田姓を名乗った。武田氏の始まりである。

義光の子信義は甲斐国を掌握し勢力を伸ばしたが、源頼朝に警戒され様々な圧力を受けた。一方、信義の五男信光は頼朝の信頼を受けて甲斐守護に就任した。

その後、鎌倉幕府方に抛り、武勲をたて安芸(広島県)守護にも任ぜられた(安芸武田氏)。

以後武田氏は鎌倉府と京都の幕府を睨みつつ勢力維持を図るものの、信満が鎌倉府から攻められ自害し、清光から分かれた同族の逸見氏が伸張する事態を招いた。

信満の子信重は合戦で京都の幕府側に立って活躍し、武田氏再興の契機を作った。しかし国内を平定し経済基盤を固めるには孫の信昌、その子信繩まで待たねばならなかった。

信繩の子信虎、その子晴信(信玄)に至り武田氏の支配は最盛期を迎えた。進軍の矛先は信濃南部から北部へ向かい上杉謙信と川中島で戦い、弱体化した今川氏の版図を狙って駿河に侵出した。

信玄は1572年、幕府の求めに応じ西に向かう途上病死した。信玄の子勝頼後武田氏は衰亡し、時代は織田・徳川氏へと傾いて行った。

さて次回から武田氏を偲ぶ散策の一助となるよう武田氏関連史跡など取り上げる。

その後、鎌倉幕府方に抛り、武勲をたて安芸(広島県)守護にも任ぜられた(安芸武田氏)。

以後武田氏は鎌倉府と京都の幕府を睨みつつ勢力維持を図るものの、信満が鎌倉府から攻められ自害し、清光から分かれた同族の逸見氏が伸張する事態を招いた。

信満の子信重は合戦で京都の幕府側に立って活躍し、武田氏再興の契機を作った。しかし国内を平定し経済基盤を固めるには孫の信昌、その子信繩まで待たねばならなかった。